

ねたきり老人と住まい方

—間取りと老人室の位置との関係—

松 原 小夜子

I. 研究の目的と方法

(1) 研究の目的

老人福祉の潮流は在宅福祉型へと転換してきているが、在宅福祉の要は地域福祉ネットワークの充実と生涯の生活の器としての住宅の整備にあるといえる。しかしながら、現状の住まいは、住まい自体が家庭内事故の原因となっていることや、身体に何らかの障害が生じれば空間的障壁（バリア）にはばまれて生活の自立が困難となることなど、厳しい実情にある。とりわけ身体機能がいちじるしく低下して「ねたきり」状態に至った場合、問題は一層深刻である。本稿ではこの「ねたきり」の場合に焦点をあてて、高齢化社会と住まいのあり方について考えてみたい。

ねたきり老人と住まいについての研究はいまだ緒についたばかりであるが、いくつかの既存研究において、住宅のバリアフリーデザインや介護の充実などが老人のADL（日常生活動作能力）の向上と介護労働の軽減に役立つことが指摘されてきている¹⁾²⁾³⁾。これら既存研究の成果をふまえながら、本稿では新しい視点として間取りと老人室の位置関係の問題をとりあげ、健康な家族を前提とした今日の一般的な間取りにおいては良好な老人室を確保することが困難である実態を明らかにすることを目的としている。そして間取りの改善方向について若干の検討を加えている。

(2) 研究の方法

本研究は「枚方市ねたきり老人介護者（家族）の会」が主体となって行った調査研究⁴⁾のうち、住宅部門の結果をまとめたものである。調査は、医療・経済・住宅・福祉の各専門分野の研究者によって構成される「ねたきり老人世帯調査チーム」とボランティアグループ「コスモス」、そして枚方市社会福祉協議会の協力で行った。

調査の対象は、枚方市ねたきり老人介護者（家族）

の会に昭和60年3月現在在籍している世帯であり、ねたきり老人がすでに死亡している世帯を含んでいる。調査対象世帯94に対して有効回収数は83（回収率88.2%）である。なお本稿の分析には住宅部門に関して図面等の記入があった68世帯を取り上げている。

調査の方法は郵送により調査票を配布し、記入時にボランティアグループ「コスモス」の会員が訪問して回収する方法をとった。住宅部門の調査項目は、住宅平面の略図、老人室の位置と各室の主な使われ方、住宅の種類と基本条件、老人室の居住性、トイレと浴室の状況などである。調査期間は昭和60年3月1ヵ月間である。

II. 対象住宅の属性

まず対象住宅の属性であるが、住宅所有形態では持家が86%、住宅の建て方では一戸建が83%、居住室数では6室以上が75%、7室以上でも55%を占めるなどかなり規模の大きい一戸建持家層が多いといえる。

これらの属性を全国的な高齢者世帯の住宅と比較するため、昭和58年住宅統計調査における「65才以上の者を含む世帯」の「全国」と「市部」の結果をみると、「市部」では持家が82%、一戸建が80%である。居住室数では、持家の場合、6室以上が58%、7室以上が39%で、平均は6.33室である。「全国」と「市部」では、両者に大差はないが、農村部を含む「全国」の方が持家・一戸建・7室以上の割合が若干高い。

このように、今回の対象住宅は室数の点で若干大きめではあるが、全国的な傾向とかなり一致していることがわかる。したがって今回の対象住宅は、一戸建持家において高齢者がねたきりに至った場合に生じる問題を考察するのにふさわしい対象と考えられる。

Ⅲ. 老人室の概要

まず老人室の基本的な特徴をとらえておきたい。

今回の対象住宅には2階建の場合が43例あるが、これらについて1階と2階のどちらのフロアが使われるかをみると、1階が39例、2階が4例である。2階の4例のうち、家族の居間が2階にあって家族生活の中心が2階にあるものが1例、2階にもトイレと台所があるものが1例あるが、こういった特殊例を除けば、ほとんどの場合老人室は1階にとられている。したがって2階建住宅における老人室のとられ方を検討するには、1階部分の室数や間取りの影響が大きいといえ、1階平面の分析が重要と考えられる。

和・洋室の別では、老人室68室中、洋室はわずか3室のみで、ほとんどが和室である。広さでは和室の6畳が最も多い(68例中38例)が、老人室としては狭小過ぎるといえる4.5畳も68例中14例存在している。

寝床様式では、和室の場合、4.5畳から6畳さらに8畳と大きくなるにつれてベッドを使用する比率が高まっており、これは最低でも6畳、できれば8畳程度の居室がうまく確保できなければベッド利用は困難であることをしめしている。概して和室でのふとん利用が多い背景には、老人がふとんを好むことや、ベッド購入には費用がかかるので差し控えられるいは洋

な場合が多いといえる。

Ⅳ. 対象住宅の間取りと平面の型

前項の結果から老人室のとられ方には1階平面の間取りや室数の影響が大きいといえるので、以下の各項では1階平面に着目して分析をすすめたい。

間取りと老人室のとられ方との関係について考察するために、まず今日の典型的な平面の型とはどのようなものかとらえてみたい。

今日における一戸建住宅の平面は全国的にみて、茶の間型・LDK型・続き間型・四つ間取型の4つに大別されるといえる(図1)⁵⁾⁶⁾。

茶の間型とは平面の中心にKまたはDKと和室の茶の間がとられるタイプ、LDK型とは同じくLDKがとられるタイプ、続き間型とは同じくKまたはDKと続き間がとられるタイプ、四つ間取型とは和室4室が田の字のように並ぶタイプである。

各型の分布を地域的にみると、大都市圏では茶の間型とLDK型が多い。茶の間型は延床面積が70~80㎡以下の小規模住宅に多いタイプである。地方都市では続き間型が多く、農村部では四つ間取型が多い。

この平面分類を基にして、今回対象とした住宅平面を型分けしてみると、表1に示す結果となった。な

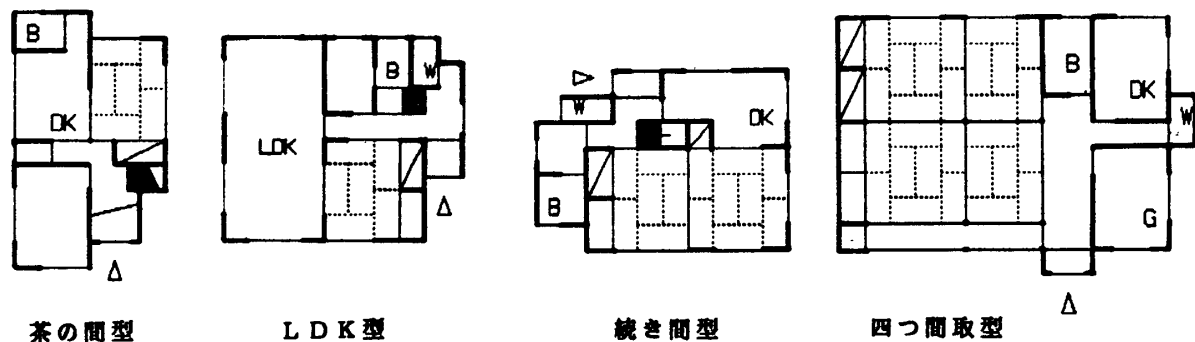


図1 平面の型の具体例

室の利用も控えられるといった経済的理由、間取り上適切な位置に洋室がないこと、平均的な居室規模は6畳であるが6畳ではベッドを置くのに狭いこと、後に述べるが茶の間を老人室に利用する場合も多いのでスペースを占有するベッドは不適當なこと、などの理由が考えられる。老人自身にとっても介護者にとってもベッド利用の方が便利であるといわれているが、間取りの制約や経済的制約から実際にはベッド利用が困難

お、茶の間型・LDK型・続き間型四つの間取型に入りきらない例を合わせて「その他の型」としている。

さて、表1によると、対象住宅では茶の間型が68例中37例、半数強と最も多い。ついで多いのがLDK型の13例、続き間型と四つ間取型は各々6例と7例である。衛星都市として急激に都市化の進行した枚方市では、小規模都市住宅平面の典型である茶の間型が存在すると同時にスプロールの進行しつつある地域やスブ

表1 対象住宅の平面の型

	計	茶の間型	L D K型	続き間型	四つ間取型	その他
計	68	37	13	6	7	5
生存	51	30	12	3	3	3
死亡	17	7	1	3	4	2

ロールが未だおよんでいない農村性を残す地域も残存していることから、続き間型や四つ間取型も混在しているものと考えられる。

これらの型と1階室数（平屋などフラットの場合は総室数）との関係をみてみると、DK（Kの場合も含む）+1～2室ではほとんどが茶の間型であるが、DK+3室以上では次第にLDK型や続き間型の比率が高まり、6室以上では四つ間取型が主であることがわかる。先に述べた平面分析の結果と同様に、平面の型と住宅規模とが密接にかかわっていることがわかる。

V. 平面の型別の老人室のとられ方

(1) 老人室の位置の分類

1階平面における老人室の位置は、大きく次の5つのタイプに分けられる。

茶の間またはL：〈茶・L〉 DKに隣接しており、間取り上茶の間またはLとみなせる居室

DKの隣接室：〈DK隣〉 DKに隣接する茶の間またはL以外の居室。DKとカギの手になり、DKから他室を通らずにいける居室を含む

茶の間またはLの隣接室：〈茶・L隣〉 茶の間またはLに隣接する居室。ただしDKとカギの手になっている場合は除く

その他の居室：〈その他〉

2階：〈2階〉

これらの老人室の位置を平面の型別に示したのが表2である。また、対象住宅平面の模式図および老人室の位置を、平面の型別・1階の室数別に一覧したものが図2である。

以下では表2と図2をもとに、平面の型別に老人室のとられ方の傾向をみてみたい。

(2) 茶の間型

茶の間型の場合、老人室として最も多く使われているのは〈茶・L〉である（37例中20例、約6割）。D

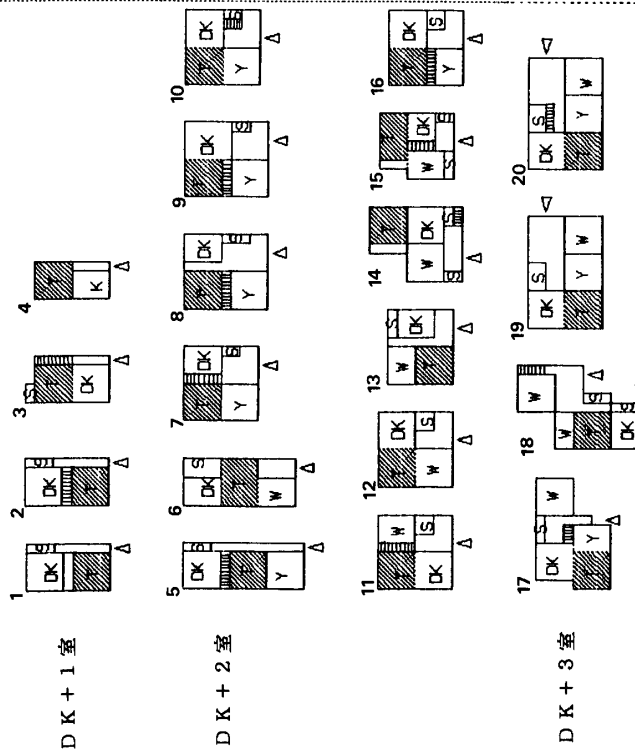
表2 平面の型別DK以外の1階室数別老人室の位置

DK+n室		計	茶・L	DK隣	茶・L隣	他	2階
計		68	23	21	11	9	4
茶の間型	小計	37	20	8	6	1	2
	1	4	4				
	2	17	12	1	3		1
	3	8	4	4			
	4	5		1	3		1
	5	1				1	
	6~	2		2			
LDK型	小計	13	1	8	3	0	1
	1	1					1
	2	2	1		1		
	3	3		2	1		
	4	5		4	1		
	5	2		2			
続き間型	小計	6	2	3	0	0	1
	3	3		2			1
	4	2	1	1			
	5	1	1				
四つ間取型	小計	7	0	0	2	5	0
	5	1				1	
	6~	6			2	4	
その他	小計	5	0	2	0	3	0
	3	2				2	
	4	2		2			
	6~	1				1	

Kに隣接する茶の間は、一般に家族生活の中心的な場として様々な行為が集中する重要な空間であるといえるが、ここが老人室としても使われれば、一層の行為の集中や家族生活との矛盾が生じざるを得ない。にもかかわらずなぜ茶の間が老人室に使われるのか、この理由を図2をもとにして間取りに対応させて考察してみたい。〈茶・L〉となるのは、まず、1階にDKと茶の間しかなく茶の間を使わざるを得ない場合である（No.1～4）。次は、DK・茶の間・和室又は洋室が一行あるいはカギの手に並ぶDK+2室の場合である（No.5～16）。DK+2室の場合は茶の間以外に1階にもう1室あるから、室数の点では茶の間の利用は避けることは可能であるが、実際には茶の間が使われている。この理由は、茶の間以外の居室というのはたいていの場合玄関脇の応接間的な居室であり、玄関脇は人の出入りなどで落ち着かないことや来客の動線と介護の動線がぶつかりやすいことなどから老人室として

茶の間型

茶の間



凡例

T : 茶の間

W : 和室

Y : 洋室

S : トイレ・浴室など水まわり

階段 : 階段

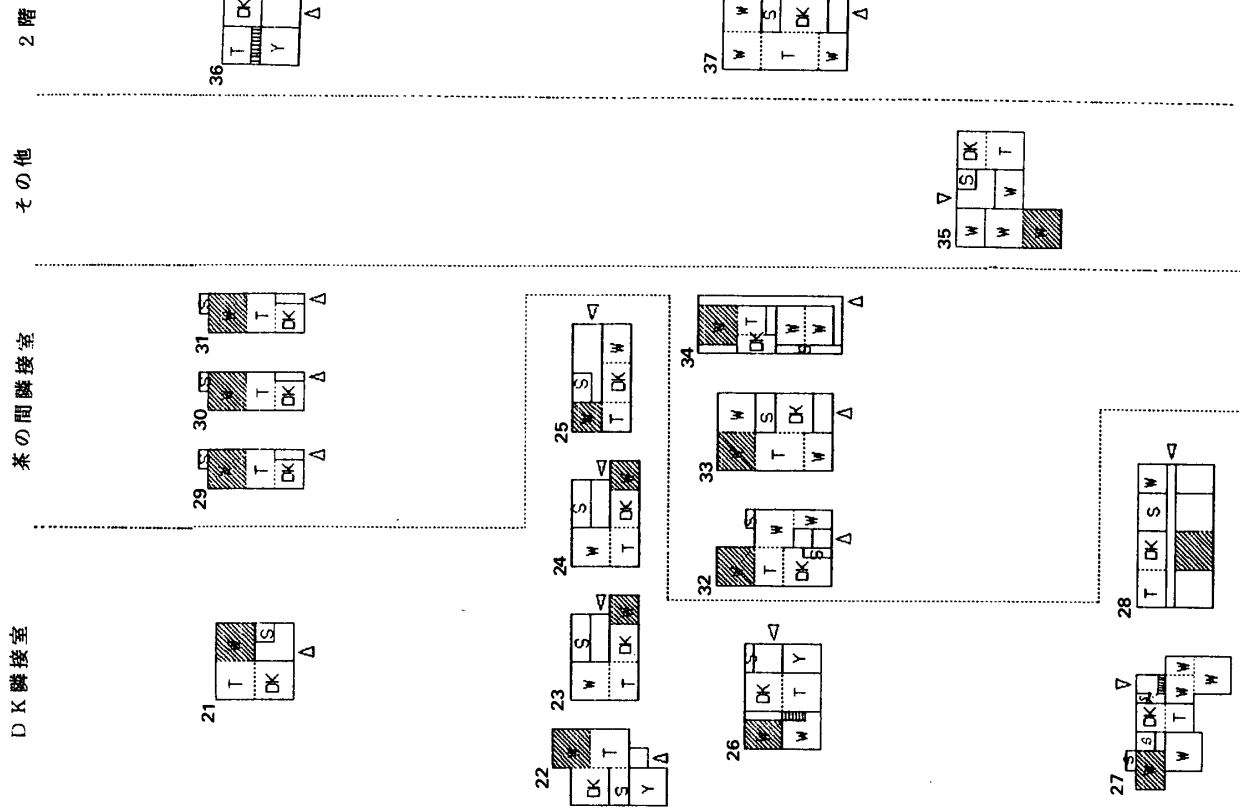


図2 平面の模式図および老人室のとらえ方 その1

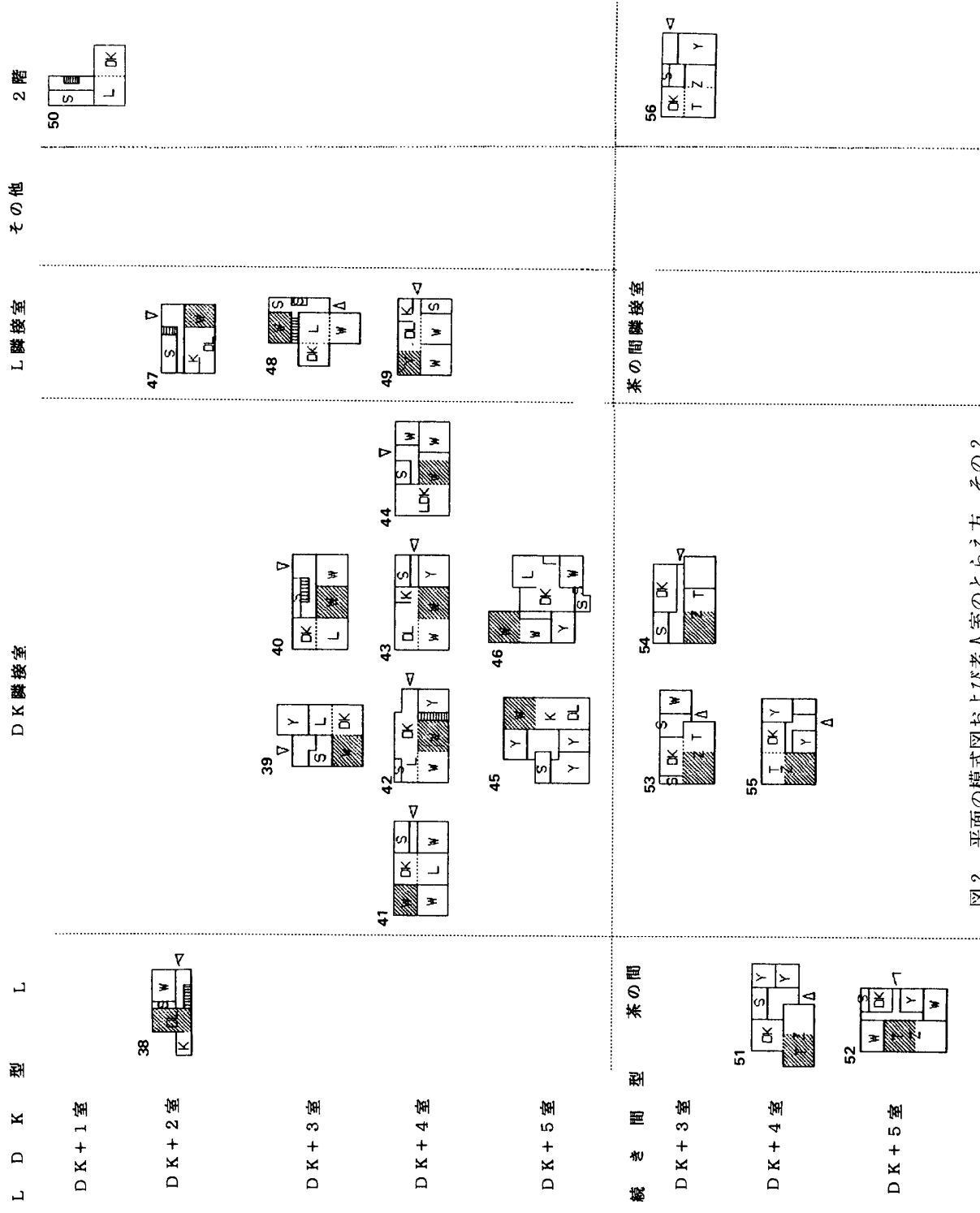


図 2 平面の模式図および老人室のとらえ方 その 2

四 つ 間 取 型



図 2 平面の模式図および老人室のとらえ方 その 3

不適当なためであろう。したがってDK+2室あっても、実際には茶の間を老人室として使わざるを得ないのである。さらに、DK+3室になると、No.19, 20のように、茶の間以外に玄関脇ではない洋室があるタイプもみられる。しかしこのタイプでもやはり茶の間が使われている。これは和・洋室の分析で述べたような理由で、洋室はあまり老人室には使われないためではないかと思われる。こういった理由から、茶の間型では、かなりの例で「茶の間」が老人室に使われているものと考えられる。

次に〈DK隣〉の7例をみてみよう。これらはいずれも、〈茶・L〉の場合に避けられた「玄関脇の居室」や「洋室」を除いてもなお、DKに隣接した茶の間以外の和室が確保できるタイプである。こういった和室があれば、茶の間を避けてその和室が使われることがわかる。

〈茶・L〉〈DK隣〉に共通する特徴点は、DKの隣接室が使われていることである。

一方、DKに近くない例として、〈茶・L隣〉が6例、〈その他〉が1例、〈2階〉が2例ある。老人室がDKの近くにとられない理由をみると、まず〈茶・L隣〉では、No.29~33のように6例中5例までが奥行き方向に居室がつらなる間取りであり、中間の居室が奥への通路にならざるを得ないタイプであることがわかる。これらのタイプでは老人室が奥の居室への通路となるのを避けて、一番奥の居室が使われているものと思われる。つまり、間取り上DKの近くには老人室がとれないタイプである。また〈2階〉のNo.37は、2階にも台所とトイレがあり、2階に老人室をとっても差し支えない特殊例である。

したがって茶の間型では、〈茶・L隣〉や〈2階〉は特殊例といえ、一般には茶の間もしくはDKの隣接室が使われやすいといえる。茶の間が使われるのは、室数や間取りの性質上茶の間を使わざるを得ない場合、DK隣となるのは、室数にゆとりがあって、DK・茶の間・玄関脇の応接間以外にもう1室確保できここを老人室として使い得る場合である。このように現状の茶の間型の間取りでは、1階がDK+3室、計4室以上なければ、茶の間を老人室に使わざるを得ないといえる。

(3) LDK型

LDK型では〈茶・L〉はNo.38の1例しかない。このタイプは玄関脇の居室を除くとLDスペースを使わざるを得ないタイプであることがわかる。この1例以外はLは使われていない。これは、LないしLDス

ペースは洋室なので老人室としては使われにくいことや、単に洋室であるだけでなく特にLにはイスやソファなどが置かれやすいから、とてもベッドまでは入りきらないことが要因であろう。

次に〈DK隣〉は13例中7例ある。図2のNo.39~46のように、玄関脇でない和室があるタイプの場合には、DKに隣接した和室が老人室に使われていることがわかる。DKの隣接和室が使われる傾向は、LDK型でも茶の間型と同様である。

DKの隣りでなくLの隣りとなる〈茶・L隣〉はNo.47~49の3例あるが、これらはいずれもDKまたはKに隣接室がないために〈茶・L隣〉が使われている場合である。

また〈2階〉となるNo.50は、1階の間取りがLDKのみのために1階には老人室をとりにくい場合である。

このようにあらわれ方は異なるが、LDK型の場合も茶の間型と共通した傾向がみられるといえる。

(4) 続き間型

続き間2室のうちDKに近い方の居室を茶の間とみなして傾向をみてみたい。続き間型の6例中2例が〈茶・L〉である（No.51, 52）。これらは、続き間のうちの茶の間に相当する居室が、「玄関脇でなくかつDKに近い和室」という条件を満たしている場合である。また6例中3例（No.53~55）は〈DK隣〉である。これらは続き間のうち茶の間でない居室が、「玄関脇でなくかつDKに近い和室」という条件を満たしている場合である。いずれにしても続き間型では、1室を茶の間に、1室を老人室に使うことが特徴である。

(5) 四つ間取型

農村住宅に多い四つ間取型では、これまでみてきた各型とは傾向が異なり、〈茶・L〉や〈DK隣〉は全くなく、〈茶・L隣〉が2例、〈その他〉が5例である。図2の間取をみると、〈茶・L隣〉となるのは四つ間のうち北東の1室とDKとがつながっている場合、〈その他〉となるのは四つ間とDKとがホールをはさんで離れている場合である。四つ間取型に共通する特徴点は、北側の「納戸」と呼ばれる居室（No.57, 58, 60）や、南側の「座敷」と呼ばれる居室（No.59, 63）が使われていることである。No.62では夏には涼しい納戸、冬には暖かい奥座敷と使い分けられている場合もある。納戸や奥座敷以外が使われているのはNo.61のみである。

一般に農家では、世帯主夫婦や老夫婦は納戸や座敷で就寝しており、この慣習が老人室のとられ方にも影響しているものと思われる。四つ間取型では居住慣習

の影響が大きいといえる。

(6) その他の型

その他の型は、〈DK隣〉が2例（№64，65），〈その他〉が3例（№66～68）ある。図2のように，〈DK隣〉となるのは，玄関脇ではなくかつDKに隣接する和室がある場合であり，また〈その他〉となるのは，DKが玄関をはさんで独立しており適当な隣接室がない場合であることがわかる。

(7) 各型に共通する特徴点

平面の型別の傾向をもとにして，各型に共通する特徴点を考察したい。

第1に，老人室のとりられ方は都市住宅と農村住宅の場合では基本的に異なっているといえる。農村住宅では特有の居住慣習が根強く引き継がれ，納戸や奥座敷が使われることが特徴である。

一方，都市住宅の型である茶の間型・LDK型・続き間型・その他の型の計61例には注目すべき特徴点がみられる。それは，〈茶・L〉〈DK隣〉が多いこと，すなわちDKに隣接する居室が使われ易いこと，である。こういった傾向になる背景を間取から読み取れる範囲で考察してみると，およそ次の5点に整理できる。

1) 1階であること：1階には，玄関や台所・浴室・トイレなどの設備が設けられている。簡単に操作できる自動昇降機が設置されていない限り，老人自身の利用の利便や介護の点から考えて，これらの設備と同一階であることは第1条件であろう。

2) 玄関脇でないこと：玄関脇の居室は人の出入りなどで落ち着かないことや，介護者や老人が設備部分へ至る動線と来客の動線とがぶつかることなどから，老人室には不向きな居室であるといえる。

3) 他室への通路とならないこと：老人室が他の居室への通路となることは老人にとっても家族にとっても不便であるため避けられるものといえる。

4) 和室であること：和室が使われ易いことの要因には，1階の居室のうち玄関脇の居室や通路となる居室を除くと和室しかない場合が多いため（40例）であることは無視し得ない。しかしながら，同様の条件を除くと1階には洋室しか残らない2例のうち1例では洋室の利用を避け不便と思われる2階の和室が使われていることや，同様の条件を除いても和室と洋室の両方を使い得る19例では，このうち17例までが和室を使っていることなど，和室が選択されていることも事実である。この理由はⅢで考察したとおりである。

5) DKの隣接室であること：この場合も和室と同

様に，玄関脇の居室や通路となる居室を除くと老人室として使えるのはDKの隣接室しかない場合が35例中33例ある。しかし同様の条件を除いてもDKの隣接室とその他の居室の両方を使い得る15例においても，11例はDKの隣接室を使っていることからみれば，DKの隣接室が選択されていることも明らかである。この理由は介護労働に関連すると思われるので次の項で考察したい。

こういった5つの条件を念頭におきながら，老人室のとりられ方と居室数との関係をみてみる。

表3は平屋などワンフロアの場合と2階建の場合に分けて，総室数と老人室のとりられ方との関係を示したものである。まず〈茶・L〉〈DK隣〉に着目してみると，ワンフロア・2階建ともに，室数が少ない場合は〈茶・L〉が主であるが，室数が増すにつれて〈DK隣〉が多くなっているのがわかる。室数が十分でなくやむを得ない場合は茶の間やLを老人室として利用するが，だんらん空間として最も便利な茶の間やLを老人の介護にも使うとなると，家族の生活と老人の生活あるいは介護とのあいだに矛盾が生じることは避けられない。そこで，室数に余裕があり茶の間やL

表3 総室数別老人室の位置

総室数		計	1 階					2 階
			小計	茶・ L	DK 隣	茶・ L 隣	他	
計		68	64	23	21	11	9	4
集合住宅・平屋	小計	25	25	5	10	5	5	
	2	1	1	1				
	3	5	5	2		3		
	4	5	5	1	4			
	5	5	5	1	3	1		
	6	2	2		1		1	
	7	4	4		2		2	
	8～	3	3			1	2	
二階建住宅	小計	43	39	18	11	6	4	4
	4	3	3	3				
	5	3	2	2				1
	6	10	9	5	2	1	1	1
	7	10	10	4	3	3		
	8	7	6	2	3		1	1
	9	5	4		3	1		1
	10～	3	3	1			2	
	不明	2	2			1		

以外にもDKに隣接した居室があるような間取りでは、茶の間やLの利用を避け、DKに隣接した他の居室が老人室に使われる傾向があるといえよう。

重要な点は、何室あたりが茶の間の利用とDK隣接室の利用の境目となるかである。表3によると、ワンフロアの場合は4室以上になるとほとんど〈DK隣〉となっているが、2階建の場合は7室あっても未だ〈茶・L〉が半数あることがわかる。これは、表4からわかるように、総室数が6～7室であっても1階に限れば3室のみであるものが半数存在しているためである。1階に4室を確保できるのは、総室数が8室以上のかかなり大きい規模の場合である。いくら総室数が多くても、2階建の場合には、結局は1階の室数が問題となってくる。先に、対象住宅や全国の高齢者住宅の属性を概観して、室数をみるかぎりではかなり良好な水準にあることを指摘したが、高齢者がねたきり状態になるやいなや、総室数ではなく1階室数が、そして1階の間取りがカギを握ることになるといえる。

表4 総室数別1階室数

		計	1 階 室 数					
			2	3	4	5	6	7～
計		43	4	13	11	10	2	3
総 室 数	4	3	3					
	5	3	1	2				
	6	10		6	3	1		
	7	10		4	3	3		
	8	7			5	2		
	9	5				4		1
	10～	3					2	1
	不明	2		1				1

総室数という単純な数値ではねたきり老人を含む世帯の住宅事情の実態はつかみきれず、より質的な問題への着眼を求めているといえる。

Ⅵ. 居住者の属性と老人室のとり方

	計	茶・L	DK隣	茶・L隣	他、2階
計	68	T 26 ● 8 ◎ 11 ○ 4	T 18 ● 4 ◎ 14 ○ 3	T 11 ● 5 ◎ 2 ○ 4	T 13 ● 0 ◎ 7 ○ 6
茶の 間 型	T 37 ● 14 ◎ 15 ○ 8	●●●●●●●●●● ◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎ ○○○ 20	●●● ◎◎◎◎◎◎◎◎ ○○ 8	●●●●● ○○ 6	○○○ 3
L D K 型	T 13 ● 2 ◎ 9 ○ 2	◎ 1	● ◎◎◎◎◎◎◎◎ ○○ 8	● ◎◎ 3	1
続 き 間 型	T 6 ● 1 ◎ 3 ○ 2	◎ ○ 5	● ◎◎	0	○ 1
四 つ 間 取 型	T 7 ● 0 ◎ 4 ○ 3	0	0	○○ 2	◎◎◎◎ ○ 5
そ の 他	T 5 ● 0 ◎ 3 ○ 2	0	◎ ○ 2	0	◎◎ ○ 3

●: 1 夫婦	◎: 1 夫婦 + α	○: 2 夫婦以上	計
17	34	17	68

図3 平面の型別・老人室の位置別家族構成

る場合や、老人と息子夫婦または娘夫婦の世帯で嫁また娘が介護する場合など。

② 1.5人：介護者が1人で、かつその人が家事もすべて行いが、時間によって手助けしてくれる人があるもの。老人と息子夫婦または娘夫婦の世帯で嫁または娘が主に介護し、息子または娘婿あるいは成人した孫が介護を手伝う場合や、老人夫婦と息子夫婦または娘夫婦の世帯で嫁または娘が主に介護し、老人の妻または夫が介護を手伝う場合など。

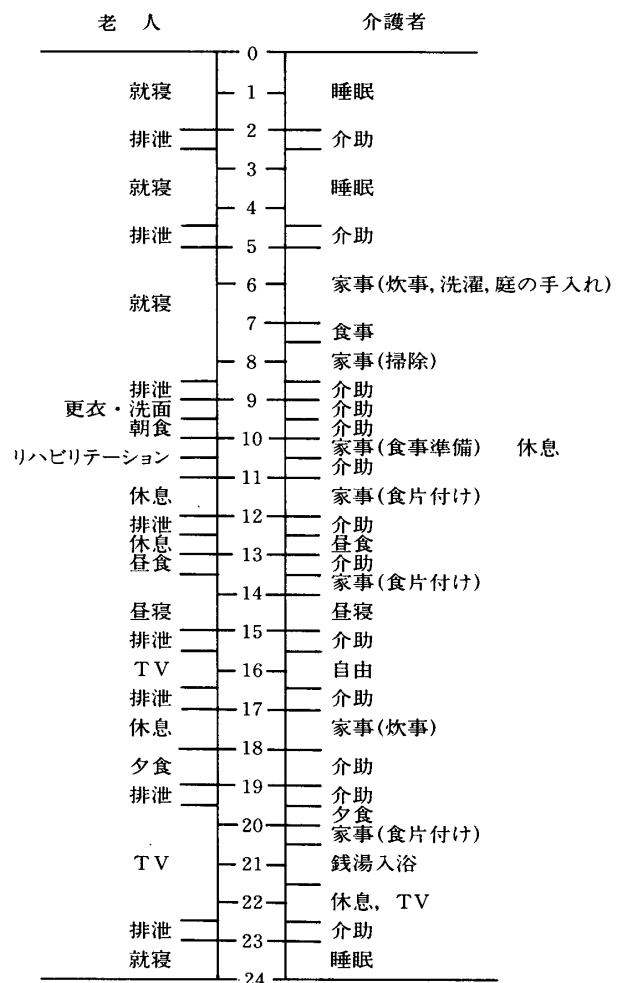
③ 2人：フルタイムで介護と家事にあたる人が2人おり、介護と家事を分担することができるもの。老人夫婦と息子夫婦または娘夫婦の世帯で嫁または娘と老人の妻または夫の2人が介護を行う場合や、老人と息子夫婦または娘夫婦そして孫夫婦からなる世帯で、嫁と孫の嫁のように介護と家事にあたる人が2人いる場合など。

介護者の3分類のうち、1人と1.5人は基本的に1人であるという点で共通しており、2人の場合とは質的に違うとみなせる。

こういった介護者の種類と、平面の型および老人室の位置との関係を示したのが図4である（この図では、〈茶・L〉〈DK隣〉はDKの隣接室としてひとまとめにしている）。介護者の状況をみると、1人が15例、1人+αが29例あり、介護者が基本的に1人の場合が68例中44例、66%を占めている。1人のひとに、介護と家事が集中している現状がうかがえる。

さて、介護者の種類と老人室の位置との関係をみると、かなり明瞭な傾向があらわれている。〈茶・L〉〈DK隣〉では、1人が18例、1.5人が20例あり、合わせると44例中38例を占めている。一方、〈茶・L隣〉〈その他〉〈2階〉では1人や1.5人の割合は相対的に減少し、2人が24例中9例と4割近くに増加していることがわかる。この結果からみると、老人室のとられ方は介護者の種類とかなり関連が深いといえ、これは注目すべき特徴点である。この理由を介護労働と家事労働の関係から考察してみよう。図5は1日の介護労働と家事労働の例を示しているが、家事の合間に介護を、介護の合間に家事をと休む暇もない様子がうかがえる。家事の中心は調理・配膳・後片付けなどの炊事であるから、介護労働と家事労働の両方を基本的に1人で担う場合には、老人室をDK、特にキッチンから近い位置にとる必要性は極めて高いといえる。

したがってDKの近くに老人室がとられる傾向には、介護者の状況が密接にかかっていることがわかり、これは注目すべき特徴点である。



(備考) 介護者の時間
睡眠(6時間15分) 生理的生活(2時間)
介護(6時間) 家事(6時間15分) 自由(3時間)

図5 老人および介護者の1日
(注7, P.119より引用)

各型のうち、四つ間取型だけはDKの近くにとられない傾向があったが、これは農家では家族人数が多く、介護や家事を担える人が2人以上確保できる場合が多いためともみられる。しかし逆に居住慣習が優先されるために、老夫婦のみであってもDKより離れた居室を使う結果となっている場合もあり、介護の負担が予想される。

(3) 老人のADL (日常生活動作能力)

ここでは老人のADLを重度・中度・軽度の3段階に分けて、平面の型および老人室の位置との関係をみてみる。

図6をみると、各型に共通して、〈茶・L〉〈DK隣〉など、老人室がDKに近いところにとられる例に

	計	茶・L, DK隣	茶・L隣	他, 2階
計	51	T 32 ● 12 ● 13 ○ 7	T 11 ● 5 ● 6 ○ 0	T 8 ● 0 ● 7 ○ 1
茶の間型	T 30 ● 10 ● 9 ○ 11	● ● ● ● ● ● ● ● ● ● ● ● ● ● ● ● ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ 21	● ● ● ● ● ● ● ● ● ● ○	● ● ● ○
L DK型	T 12 ● 4 ● 6 ○ 2	● ● ● ● ● ● ● ● ● ● ○	● ● ● ● ● ● ● ● ● ● ○	○
続き間型	T 3 ● 1 ● 1 ○ 1	● ○		●
四つ間取型	T 3 ● 1 ● 1 ○ 1		● ● ● ● ● ● ● ● ● ● ○	○
その他	T 3 ● 1 ● 1 ○ 2	●		● ● ● ● ●
●:重度 ●:中度 ○:軽度 計				
17 19 15 51				

図6 平面の型別・老人室の位置ADL

ADLが重度の場合が相対的に多く、逆に〈その他〉〈2階〉では重度は1例もないことがわかる。茶の間型の〈茶・L隣〉にも重度が4例あるが、このうち3例はタテ長タイプのプランであるため、〈茶・L隣〉とならざるを得ない場合である。また四つ間取型の〈茶・L隣〉にも重度が1例あるが、これは、四つ間取型においては、居住慣習の影響が強く、ADLに関わらず納戸や座敷が使われるともみられる。したがって、ADLが重度の場合、すなわち介護の必要性が高い場合ほど、〈茶・L〉〈DK隣〉などDKに近い居室にとられる傾向があるといえる。

このように、老人室のとりられ方は、家族構成・介護者の種類・老人のADLなど居住者の属性とも関連が深いといえる。そして〈茶・L〉〈DK隣〉などDKの隣接室にとられる場合と〈その他〉〈2階〉とは傾向が明らかに異なること、〈茶・L隣〉は両者の中間的な性質を示すことが特徴である。〈茶・L〉〈DK隣〉は、世帯規模が小さく介護者が1人ないし1.5人

の場合や、老人のADLが低い場合など、介護上かなり困難をかかえる世帯が多い。これに対して〈その他〉〈2階〉は、世帯規模が大きく介護者が2人以上いる場合や、老人のADLが高い場合など、相対的には困難度の低い世帯が多い。このことは、介護者やADLの点で条件が整っている世帯ではDKから離れた位置などに老人室を比較的自由に選択できるが、一般には老人室の位置はDKの隣接室に限定されざるをえないことをしめしていよう。

Ⅶ. 老人室のとりられ方の現状と問題点

以上の考察に基づき、老人室のとりられ方の現状および問題点について得られた知見を整理し、本稿のまとめとしたい。

1) 2階建住宅の場合、老人室はほとんど1階（台所・浴室・トイレなどのある主要階）にとられている。このため総室数が6～7室あるタイプでも、実質

的には3～4室のフラットの場合と同様の問題をかかえる場合が多い。したがってねたきり老人世帯の住宅事情は総室数だけではとらえることはできないといえ、1階の室数や間取りに着目すべきである。

2) 1階部分において老人室は、① 玄関脇でないこと ② 他室への通路とならないこと ③ 和室であること ④ DKの隣接室であること、の各点を満たす位置にとられる傾向がある。これらのうち①②は家族や来客の動線と老人の動線とのぶつかりを避けるために求められる基本条件である。③の和室については、ベッド購入には費用がかかるといった経済的理由の他に、「応接間」として玄関脇にとられ易い洋室は老人室には不向きであることや、居室の広さとして最も一般的な6畳程度の洋室ではベッドを置くには狭過ぎるという居室の広さの制約もある。洋室の位置や広さの改善が必要であろう。

3) 4つの条件のうちDKの隣接室であることにについては、家族形態・介護者の種類・老人のADLなど居住者属性との関係が深い、このうち介護者の種類の影響が最も大きく注目に値する。老人の介護者は同時に家事労働の担い手でもある場合が多い。家事の中心は炊事であり、炊事と介護労働の両方を1人で担う場合には老人室をDK、特にキッチンに隣接した位置にとる必要性は極めて高いといえる。

4) しかしながらDKに隣接した位置というのは家族のだんらん空間としても重要であるから、老人室の確保とだんらん空間の確保との間に矛盾が起こりやすい。またホームヘルパーなど家族外の援助を受けるにあたって、家族生活のプライバシーの面で援助を頼みにくい状況にあると思われる。

これらの問題が回避できるのは、老人室には不向きな居室、例えば玄関脇の居室や他室への通路となる居室そして茶の間やLなどを除外してもなお、DKに隣接した和室あるいは8畳以上の洋室が確保できる場合、すなわち、1階に4～5室以上ある場合に限られてくる。居室がコンパクトにまとまり易い集合住宅では、DK周辺に居室が集まるので総室数が4室程度の規模でも老人室の確保という点でみれば比較的良好な条件にあるが、2階建の持家で1階室数が2室の場合や、1階室数が3室あっても玄関脇に洋室がとられているタイプでは茶の間への生活の集中は避けられない。総2階建形式で総室数は多くとも1階室数そのものは少ない住宅タイプは、ねたきり老人の介護という点では困難の多い住宅タイプと考えられる。したがって、DK周辺の居室構成のあり方や、住宅形式そのもの

のあり方を問い直してみる必要があるといえよう。

5) 農村住宅の典型である四つ間取型の場合は、都市住宅とは傾向が異なっている。四つ間取型では居住慣習が優先されるため、DKの隣接室は使われず、納戸あるいは座敷が老人室に使われる。介護者が複数いる場合には問題ないが夫婦のみの世帯などで介護者が1人しかいない場合には、介護負担が増さざるを得ない。

6) このようにねたきり老人介護世帯の住まいは、室数のみではとらえきれない「質的」な問題を多くかかえていることが明らかになった。将来的な家族形態の動向や女性の社会進出の動向を考えれば、介護労働と家事労働を1人で担う傾向はもっと増加するであろうし、家族以外の援助者の必要性も高まるであろう。介護労働と家事労働が軽減でき家族以外の援助者を気かねなく頼めるような、室数や間取りの改善が望まれる。

注

- 1) 在塚礼子他：ねたきり老人の居住環境に関する研究、日本建築学会関東支部研究報告集、昭和55年、p. 189～192
- 2) 林玉子：「心身機能の低下による住まい方の特性と物的条件のとりえ方」『高齢社会に向けての住居・住環境の課題』所収、日本建築学会建築計画委員会、昭和59年、p. 42～53
- 3) 菊沢康子：「寝たきり老人—その介護と住空間・住設備」、高阪謙二他編『老人と生活空間』所収、ミネルヴァ書房、昭和59年、p. 68
- 4) 枚方市ねたきり老人介護者（家族）の会：枚方市ねたきり老人世帯（会員）調査報告書、昭和61年
- 5) 住田昌二：「独立住宅平面の地方差」、住田昌二編著『現代住宅の地方性』所収、頸草書房、昭和58年、p. 108
- 6) 松原小夜子他：続き間型独立住宅に関する研究 その8、日本建築学会近畿支部研究報告書、昭和60年、p. 345～348
- 7) 菊沢康子：「ライフサイクルと家事労働」『いま家事労働に問われるもの』所収、有斐閣選書、昭和59年、p. 119